

今日の説教のポイント <詩編33編1～22節>

今日は詩編33編をとおして私たちが神を賛美せずにはおれない者たちであるのはなぜなのかをはっきり覚え直し、思いを新たに神を仰ぎ神に向かって立って行きましょう。

①神賛美への招き—誰が神をほめ歌うように促されているのか (1-3)

この詩にはただ高らかな明るい神賛美が終始一貫しています。だからといって、この詩を何の問題も無い人だけを賛美に招いていると読むこともないでしょう。なぜなら、問題のない人などほとんどないと言ってよいからです。しかし詩人は、そういう現実の中から、「主に従う人」は皆、誰でも、主なる神の恵みと大能を事ある毎に覚え直して、喜びと賛美の「新しい歌」を主に向かって歌え、と促されているのです。

②私たちの神賛美の出てくる二つの根拠

i : 神は天地の造り主であるのだから (4-9)

私たちの神賛美は、まず、天の万象(日月星辰)を造り大地と海を分けられた創造者なる神への畏敬に発します。その神が恵みと慈しみに満ちて、ご自分の造られた世界を保持し支配しておられることを思うとき、私たちは自ずと神への感謝と喜びを新しくし、神をほめ歌わずにはいられない者とされるのです。

ii : 神は世界の歴史を支配し導かれる主であるのだから (10-19)

歴史の中には幾つもの強国が興って当時の世界を支配し暴虐をほしいままにしたかに見えたときがありました。しかし不思議なことに、それらの国々は皆、いずれも、やがて倒れていきました。馬も兵の数も(どんなに強力で確かに見える軍事力も)、救いにとって中身のない空虚な偽りのものだったのです。この世界の歴史は、遂には神の见えない手によって導かれ、神の企てと計らいが成っていくのです。

その神の凝視が私たち一人ひとりの上に注がれているのですから、私たちは神への畏れと共に信頼と安心をひき起こされて、神を喜び賛美せずにはおれなくされるのです。

③そのように神賛美の民とされた者が心をひたすら神に向けて神を待ち望む者であるのは、自然なこと (20-22)

(日本キリスト教会教師 桑原 昭)